

映画で考える 戦争と平和 / 第8回

『ホテル・ルワンダ』授業ガイド

世界の無関心と、見捨てない勇気——『遠くの出来事』を、自分ごとに。

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	世界の無関心と、見捨てない勇気（「遠くの出来事」に私たちはどう向き合うか）
教材映画	『ホテル・ルワンダ』（原題 Hotel Rwanda／2004年・イギリス、南アフリカ、イタリアほか／監督・脚本：テリー・ジョージ）
対象	中学生以上。虐殺の遺体や暴力の場面を含む（直接的な描写は比較的抑えられている）
時間	標準100分（50分×2）。上映122分。厳選クリップ・あらすじ紹介を組み合わせる
中心概念	ルワンダ虐殺／憎しみをあおる言葉（ラジオ）／国際社会の無関心／映画と現実のちがい
ねらい	虐殺を後押しした言葉と無関心のしくみを理解し、遠くの出来事を自分ごととして考える視点を持つ
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／アフリカの地図（ルワンダの位置）／筆記用具

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠ 虐殺描写・民族の扱い（重要）

本作は1994年のルワンダ虐殺をもとにした作品で、**虐殺の遺体や暴力の場面**を含みます（直接的な描写は比較的抑えられています）。

- 年齢区分はソフト・配信により表示が異なる場合があるため、**上映前に確認**する。
- 「フツ」「ツチ」の区別を**固定的な民族像として教えない**。植民地時代の分断政策など歴史的背景を補う。
- モデルとなった人物をめぐる**評価が分かれている**ことを、必要に応じて伝える（下記参照）。
- アフリカ全体を「危険な場所」とする偏見につながらないよう、**現在のルワンダ**にもふれる。

📄 レイティング・著作権について

- 年齢区分は配信版・ソフトにより表示が異なる場合があります。使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 ルワンダ虐殺（予備知識）

何が起きたのか

ルワンダでは、植民地時代に人々が「フツ」と「ツチ」に区別され、対立があおられてきました。**1994年**、大統領機の撃墜をきっかけに、フツの過激派によるツチや穏健派フツへの虐殺が始まり、**約100日間で80万～100万人**が殺害されたとされます。

言葉と無関心

ラジオ放送が「敵」をあおる言葉を流し続け、普通の人々まで虐殺に加わっていきました。一方、国連の平和維持部隊は小規模なまま、多くの外国人は国外に避難し、世界は大きく動きませんでした。特集第4回『シンドラーのリスト』で見た「言葉から段階的に進む差別」の構図が、ここでも繰り返されました。

💡 「英雄」をどう扱うか

モデルとなったポール・ルセサバギナは1200人以上をかくまったとされ、映画で世界的に知られました。一方で、生存者の中には異なる見方をする人もいます。彼はのちにルワンダ政府を批判する活動を行い、2020年に拘束され、テロに関わる罪で有罪判決を受けました（2023年に減刑されて釈放）。この裁判の公正さを疑問視する声もあります。**映画と現実とは同じではない**ことを、特集「情報を見極める」の視点とあわせて扱えます。

「見捨てない」を考える4つの視点（板書用）

① 憎しみをあおる言葉

ラジオの言葉が、普通の人々を動かした。

② 「かわいそう」で終わる

映像を見ても、食事を続ける人々。

③ 決められない国際社会

「虐殺」と認めることにも慎重だった。

④ 自分にできること

遠くの出来事を、自分ごととして考える。

🎯 この授業の到達目標

虐殺を後押しした言葉と国際社会の無関心について説明でき、映画の場面を根拠に「遠くの出来事」に向き合う自分なりの方法を考えられる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	「遠くの国の悲しいニュースを見たとき、あなたはどうする？」と問う。
10-22分	背景	地図でルワンダを確認。植民地時代の分断、1994年の虐殺、ラジオの役割を説明。
22-48分	映画を観る①	ホテルの日常～虐殺の始まり、人々をかくまう場面（クリップ）。
50-70分	映画を観る②	外国の部隊が自国民だけを連れて去る場面、「かわいそう」のセリフの場面など。
70-88分	ワーク記入	世界が動かなかった理由と、自分にできることを考える。
88-100分	共有・まとめ	特集全体をふり返し、板書「『遠くの出来事』を、自分ごと。」で締める。

🌱 まとめ

虐殺は、武器を持つ人だけでなく、それを知りながら何もしない人々によっても続いてしまうことがあります。特集の最終回として、これまでの8本——一人の命の重さ、美化しない目、非暴力、対話——をふり返し、「遠くの出来事」を自分ごととして考える方法を話し合ってください。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Hotel Rwanda / ホテル・ルワンダ
製作年・国	2004年・イギリス、南アフリカ、イタリアほか。上映122分。日本公開：2006年
監督・脚本	テリー・ジョージ（北アイルランド出身。本作でアカデミー脚本賞にノミネート）
日本公開の経緯	当初は劇場公開の予定がなく、映画ファンらの署名運動がきっかけで2006年に公開が実現
実話の背景	1994年のルワンダ虐殺。約100日間で80万～100万人が殺害されたとされる

主なキャストと役柄

- ドン・チードル（ポール・ルセサバギナ役）：計算高いビジネスマンが、人々を守るために知恵をしぼる姿を演じ、アカデミー主演男優賞にノミネート。
- ソフィー・オコネドー（タチアナ役）：ポールの妻。家族を守りたい思いと恐怖の間で揺れ動く。

100日間の追悼

ルワンダでは現在、民族の区別を強調しない政策がとられています。毎年4月からの100日間は、虐殺の犠牲者を追悼する期間とされています。

※上記の事実は公開情報（映画.com、Wikipedia、CNN.co.jp等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. 世界の国々は、なぜ動かなかったのだろう？

→ 「遠くの国」「決められない国際社会」など複数の要因を挙げさせる。単純な悪者探しにしない。

Q. 「かわいそう」と言いながら食事続ける——このセリフをどう受け止めた？

→ 自分自身のニュースの見方にひきつけて考えさせる。責める方向にはしない。

Q. 映画の「英雄」と、現実の人物評価がちがうとき、どう考えればいい？

→ 映画は「実話をもとにした物語」であること、複数の情報にあたる大切さに気づかせる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- 虐殺を後押しした言葉と無関心のしくみを、具体的に説明できているか。
- 「フツ」「ツチ」を固定的な民族像としてとらえていないか。
- 遠くの出来事に対して、自分にできる具体的な行動を考えられているか。
- 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する（家族の戦争体験などに触れる生徒への配慮）。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	1917 命をかけた伝令	一人ひとりの命の重さ	中学生～
2	西部戦線異状なし	戦争を美化しない目	高校生～
3	ダンケルク	生きて帰るという勇気	中学生～
4	シンドラーのリスト	一人の選択が命を救う	高校生～
5	硫黄島からの手紙	敵にも家族がいる	中学生～
6	ガンジー	暴力を使わずに社会を変える	中学生～
7	ブリッジ・オブ・スパイ	対話と交渉で争いを止める	中学生～
8	ホテル・ルワンダ	見捨てない勇気	中学生～

8 参考資料（主な出典）

ホテル・ルワンダ 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

Wikipedia「ホテル・ルワンダ」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ホテル・ルワンダ>

CNN.co.jp「映画『ホテル・ルワンダ』の英雄釈放、テロ罪で禁錮25年も減刑」 <https://www.cnn.co.jp/world/35201720.html>

作品：映画『ホテル・ルワンダ』（2004年、監督テリー・ジョージ）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。